様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０１０２８

研究課題名（和文）『三朝北盟会編』所収史料から見た靖康の変前後の金宋関係の研究

研究課題名（英文）The Study of Jin-Song Relation around the Jingkang Incident, Based on the Documents Collected in Sanchao-beimeng-huibian

研究代表者
毛利　英介（Mori, Eisuke）

関西大学・東西学術研究所・研究員

研究者番号：１０６３３６６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本課題では南宋代成立の史書『三朝北盟会編』を主要な研究対象とした。その研究成果は大きく二つに分かれ、一つは具体的なテーマに関する成果であり、もう一つはより基礎的な書誌学的テーマに関する成果である。前者としては『紹興甲寅通和録』を利用した劉斉をめぐる国際関係に関する成果があり、後者としては文瀾閣本『三朝北盟会編』と『靖康稗史』に関する基礎的な研究がある。またその他に、『三朝北盟会編』をめぐる近年の史料状況の激変について言及した学界動向も執筆した。新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い当初想定した海外調査は出来なかったが、全体として想定どおりかそれ以上のバランスの取れた成果を挙げたと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究課題では南宋代成立の史書『三朝北盟会編』を主たる研究対象とした。同書は北宋末から南宋初における対金関係を叙述しており、かねて当該時期の研究における根本史料と評価されて来た。だが扱いに難しさがあることから、従来十分に使用されているとは言いづらい。本研究ではかかる特徴を有する『三朝北盟会編』に対して、近年の史料状況の変化を踏まえつつ関連の基礎的検討を行った。これは今後の同書の利用、延いては宋・遼・金代史への貢献として学術的意義を有するほか、同書が近代において刊行・流通する際の背景には近代中国のナショナリズムも存在することから、現代中国を見るための基礎的情報として一定の社会的意義も有する。

研究成果の概要（英文）：The main subject of this project was Sanchao-Beimeng-huibian, written in the Southern Song dynasty period. The results of this research can be divided into two main categories: one is the results related to specific themes, and the other is the results related to more basic bibliographical themes. The former includes the result on international relations concerning Liu Qi using the Shaoxing-jiaoyin-tonghelu, and the latter includes basic research on the Wenlangku version Sanchao-beimeng-huibian and Jingkang-baishi. In addition, I also wrote an academic trend that refers to the recent drastic changes in the historical material situation concerning Sanchao-Beimeng-huibian. Although it was not able to conduct the overseas research that had been initially anticipated due to the spread of the new coronavirus infection, I believe that I have achieved a well-balanced result overall, as expected or even better.

研究分野：アジア史

キーワード：金　南宋　三朝北盟会編　靖康稗史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)遼（907～1125）と北宋（960～1127）の間では、1004 年に名分上完全に対等な盟約である澶淵の盟が結ばれた後、約 120 年にわたり安定した関係が推移した。しかし、北宋は新興勢力である金（1115～1234）と 1120 年にいわゆる海上の盟を結んで遼を挟撃する道を選び、その結果遼を滅ぼすことに成功した。だが今度は金と北宋が対立し、北宋は首都・開封を占領され、太上皇帝の徽宗及び在位の皇帝である欽宗父子も捕虜となり滅亡した。靖康の変である（1127）。その際に、欽宗の弟である高宗が南方に脱出して即位し、現在の杭州を事実上の首都として成立した亡命政権が南宋（1127～1276）である。かかる経緯から、南宋はその初期において十余年にわたり金と全面戦争を展開した。その後に金と南宋の間では、金の軍事的優位のもと、金の皇帝を君主・南宋の皇帝を臣下とする大定/紹興和議が 1142 年に成立した。以後、1160 年代と 1200 年代の二度にわたり和議（＝盟約）が破綻して両国が全面戦争に至る局面は存在したが、いずれも短期間で和議が再締結された。その結果、和議により名分は変化したが、一貫して金を名分上・実態上ともに優位とする比較的安定した関係が 1218 年に至るまで 100 年近く金と南宋の間では継続した。本研究では、以上のうち 1120 年から 1142 年までの約 20 年間を「靖康の変前後」ととらえ、この混乱期・過渡期の金・宋関係のあり方への理解を深化させることを目指したものである。

(2)靖康の変前後に関する研究としては、日本での古典的成果である外山軍治『金朝史研究』（東洋史研究会、1964）や中国での代表的成果である趙永春『金宋関係史』（人民出版社、2005）のように、比較的概括的・叙述的な研究が多い。近年の掘り下げた研究としては、周立志「王倫与宋金外交」（『遼金史論集』第十四輯、2016）が思い浮かぶ程度である。無論、上記の古典的・代表的研究は先駆的成果として価値は高く、また対象が混乱期・過渡期であるだけに「治乱興亡」的・叙述的になるのもやむを得ない。しかし、本研究で一歩を進めることを目指した。なおいま少し視野を拡げると、中国大陸を中心に広い意味で本研究関連する研究は実は多い。だがそれは主に南宋政治史の観点からのものである。例えば岳飛に関する研究が挙げられよう。そしてまさに岳飛関連の例から想定しやすいように、そこにはナショナリズムが介在しやすい。近年、中国において南宋の研究が隆盛であるにも関わらず本課題が成立しうるのは、研究代表者が「外国人」であることにも一因がある。なお日本では寺地遵『南宋初期政治史研究』（渓水社、1988）が存在し優れた業績だが、やはり本研究の視点とは異なる。

２．研究の目的

本研究が直接に研究対象とする時期は短い。だが、その時期の研究を深化させることによって、先立つ遼と五代・北宋の関係および続く金と南宋の関係との断絶と継続を明確にし、その全体を一貫して把握するという目的が存在する。これが実現できれば、まず唐の滅亡からモンゴルの出現までの約 300 年間の東アジアの国際関係の理解がより明確となる。そしてその結果として間接的に得られると想定する成果　目的を以下に二点挙げる。

(1)モンゴル出現以前の数百年間の東アジアの国際関係が全体的に把握されることによって、モンゴル出現以後現在にいたるまでの「中華」のあり方と対比可能になることである。モンゴル出現以降の元・明・清・中華民国・中華人民共和国はいわば大きな中華である。そのことが、現在を含めた中国の通時的な対外関係を見る際に「中華思想」で語ってしまう傾向をもたらす。だが、実際にはモンゴル出現以前には対等ないし対等に近い関係性が存在したのであり、その理解は現代中国を見る際にも深みをもたらす。

(2)金と南宋の関係は金の軍事的優位の下で名分上も金優位に推移したが、かかる状況が南宋において一種のナショナリズム（＝華夷の別）を濃厚に含んだ朱子学を生み出すことに繋がった。朱子学は、以後の時代、場合によっては現在に至るまで東アジアに大きな影響を与えている。本研究は、そのような朱子学を生み出した時代が如何に準備されたかを理解することで、その後の東アジアの理解のための基礎的情報を提供することとなる。つまり本研究が直接分析を加える時代は短いが、間接的には長い時代を射程に入れている。

３．研究の方法

(1)靖康の変前後の金・宋関係に関しては、既に代表的研究として既述の外山軍治 1964・趙永春 2005 が存在する。これらの研究の価値は高く、本研究でも依拠する。ただし、これらの研究の問題として叙述的で分析がさほど深くない点が存在する。この点を乗り越える本研究の独自性・創造性として、歴史学の根本たる史料の利用のあり方に細心の注意を払う。具体的には『三朝北盟会編』の積極的利用である。当該時期の金・宋関係に関する史料としては、南宋側に由来するものが分量として圧倒的に多く、その代表的史料として『建炎以来繫年要録』と『三朝北盟会編』が存在する。そのうち従来の研究では『建炎以来繫年要録』の利用に重点が置かれて来た。『建炎以来繫年要録』は南宋初期を対象とした編年体の史料である。編纂段階で複数の史料を併せ見て叙述がなされており信頼性が高い。それ故、南宋初期の研究では対金関係に限らず根本史料と

して扱われて来た。よって、当該時期の金・宋関係の研究でも重点的に使用されてきたのは自然である。更には、同書は版本の系統が単純な上、近年中華書局から標点本が刊行された。その点でも利用がしやすい。そのため、今後も当面は同様の状況が継続することが見込まれる。ただし、様々な意味で「整えられている史料」は歴史学的には危険でもある。それに対し『三朝北盟会編』は、やはり時系列的な史書で、対象とする時期も『建炎以来繫年要録』と重なるが、依拠した史料を未整理なまま見出しのもとに直接引用する形式をとる。即ち、より「生」に近い史料として価値が高い。だが、同書は戦前に中国で標点本が刊行されているが依拠には耐えない。そのため、個々に複数の刊本・鈔本を照合しつつ利用する必要がある。よって、同書は史料的価値に比して積極的に使用されていない状況にある。本研究は、以上のような従来の史料の使用状況から、『三朝北盟会編』を積極的に利用することによって研究の深化を試みるものである。

(2)本研究で着目する『三朝北盟会編』は、上述のように史料原文を引用する形式をとる。本研究では、その特徴から個別の引用史料に注目する。具体的には史料①「宣和乙巳奉使金国行程録」・史料②「紹興甲寅通和録」・史料③「紹興講和録」である。

これら三種の史料は以下のような内容・性質を有する。

・史料①：1125 年という北宋の最末期に、まだ友好関係にあった金に派遣された使節による日記体史料である。前後の北宋から遼、南宋から金への使節が遺した同様の史料の間をつなぐ位置にあり、外交使節に関する制度・儀礼等の断絶と継続について知ることができる。

・史料②：1134 年という金と南宋の全面戦争期に、南宋から金に派遣された使節が記した日記体の史料である。同使節は目的地に到達せず使命を果たせなかったことから、史料②は従来注目を集めていない。しかし、地の文・金側との会話・金側への外交文書という三層の構成から垣間見える当時の南宋の本音と建前のギャップ等の同史料固有の価値のほか、外交使節の派遣準備や対金関係上の制度的側面の記述は、前後の時代を繫ぐ価値がある。

・史料③：1142 年に皇統/紹興和議が締結される前後に金の皇族・完顔宗弼（当時の金の対南宋最高責任者）と南宋の高宗皇帝の間で交わされた外交文書の集成である。君主が関わる外交文書という観点で、やはり前後の時代を繫ぐ価値が存在する。

なお史料①・②は既に趙永春『奉使遼金行程録（増訂本）』（商務印書館、2017）で整理されているが、①は『三朝北盟会編』に関してどの版本を使用したかが述べられず、②は具体的に複数の版本の利用は述べられるがなお不十分である。③については、Franke（注）を初めいくつかの重要な研究はあるが従来十分な整理作業がない。本研究では具体的には三種の史料を扱うことから、年一種の史料に関して『三朝北盟会編』諸本間の校訂作業を行う。また三種の史料はそれぞれ『三朝北盟会編』以外の史書にも収録・引用されるため、それらとの校勘作業も行う。そして、各年度において整理の対象とした史料の内容に関する研究成果を公にする。以上が、当初の計画において提示した方法である。

（注）FRANKE Herbert 1997, Treaties between Sung and Chin, Herbert Franke and Hok-lam Chan eds., Studies on the Jurchens and the Chin Dynasties, Ashgate Publishing Limited,1997（初出 1970）

４．研究成果

(1)「宣和乙巳奉使金国行程録」に関する成果

当初の研究計画で史料①として挙げた「宣和乙巳奉使金国行程録」（以下「行程録」）については、実際に成果を残すことが出来た。この史料に就いては、京都大学人文科学研究所共同研究班での会読範囲でもあったため、非常にじっくりと望むことが出来た。関係各位に感謝したい。まず研究の前提となる主要なバージョンのテキストの比較に関しては、その結果をリサーチマップ上に提示している。その上で、「行程録」に注目する形で文瀾閣本『三朝北盟会編』の成り立ちについて解明した。なおここで附言すると、文瀾閣四庫全書は太平天国で大きな損害をうけたため、残存した部分（原鈔）と補われた部分（補鈔）が存在する。さて結果として、現在閲覧可能な文淵閣本・文津閣本・文瀾閣本（原鈔部分）の間で「夷狄」に関する表現を中心に相当大きな違いがあること、文瀾閣本原鈔部分は通行本である光緒末年刊行の許本『三朝北盟会編』との関係が深いこと、文瀾閣本『三朝北盟会編』補鈔部分は光緒初年出版の袁本『三朝北盟会編』を鈔写したものであることを明らかとした。これまで研究に使用されてきた『三朝北盟会編』の通行本の位置づけのみならず、四庫全書編纂のあり方の理解にも一石を投じるものである。特に後者に関しては、一般に四庫全書については中国文化の代表的存在として中国において関心が高いが、文瀾閣四庫全書所収のテキストについてのここまで詳細な分析は『三朝北盟会編』に限らずこれまで存在しない。基礎的業績として、長期的に参照されるものとなると自任する。

(2)「紹興甲寅通和録」に関する成果

当初の計画で史料②として挙げた「紹興甲寅通和録」（以下「通和録」）についても、実際に成果を残すことが出来た。これも研究の前提となる主要なバージョンのテキストの比較に関しては、その結果をリサーチマップ上に提示している。その上で、具体的な研究として、「通和録」に出現する金・南宋・劉斉という三つの王朝に対する自称と他称について検討した。その一端を示すと、南宋は国内では金を「虜」・「夷」と称したが、外交上は自らの君主たる存在として「上国」・「大国」と称さざるを得なかった。これは、金宋関係を後まで規定するものである。また、南宋・金とも金の傀儡国家である劉斉を公式には「大斉」と称したが、南宋は国内では「偽斉」と称し、金も南宋との非公式の会話ではそれをあからさまに「附庸」と称していた。このように、

当時の生々しい実態を解明することが出来た。研究計画でも述べたが、南宋に関する研究が増大する中国大陸でも、かかる同時期の「傀儡国家」の「王朝」としてのあり方については研究が少ない。そこには政治的な事情も存在すると思われるが、それだけに、この成果は基礎的かつ今後に踏まえられることとなると考える。

(3)『靖康稗史』に関する成果

当初の計画で史料③として挙げていた「紹興講和録」については、結果として扱うことが出来なかった。ただしこれには「積極的」な事情がある。それは、「行程録」研究の過程において関連の史料として『靖康稗史』に対しより本格的な検討が必要であるとことが判明したため、「行程録」研究の延長として研究対象を切り替えたことである。『靖康稗史』は南宋成立とされる 7 つの史料の総称であるが、その一つが実は「行程録」である。そこから『靖康稗史』への着目が始まった。その後『靖康稗史』所収の「行程録」を子細に検討すると、それが光緒初年出版の袁本『三朝北盟会編』という『三朝北盟会編』諸本のなかでも独特なバージョンに酷似することに気づいた。つまりは、『靖康稗史』が南宋成立という所伝は疑わしく、実際には 19 世紀末の成立としか考えられられないことになる。この観点については二回の口頭発表と一本の論文を公表した上でさらに現在進行形で研究中だが、いずれにせよ結果として当初の計画でも言及していた、靖康の変前後に関する研究と中国近代の「ナショナリズム」との関係という論点に関わる研究を遂行したものである。そして本課題での成果を基礎に今後も同史料に関して引き続き研究を行っていく予定である。

(4)その他

『三朝北盟会編』所収史料から靖康の変前後について解明するというのが本研究の課題であったが、同時にその前後の時代も射程に入れるという計画であった。そのような前後の時代に対する成果も複数存在するが、「『中興礼書』から見た高宗弔祭使関連儀礼の諸相」をその代表として挙げておく。南宋期の国家編纂の礼書である『中興礼書』は、諸般の理由からさほど研究上の利用が進んでいない。その内容の多くは当然ながら南宋国内での国家儀礼についての記述だが、その中に一定の対金関連儀礼の記述が存在し、そこからいわゆる南宋期の「受書礼」（金使から南宋皇帝が国書を受領する際の儀礼）について検討した。これは、南宋初期（本計画で言う「靖康の変前後」に含まれる）の状況を踏襲した儀礼が多少形を変えつつも 1180 年代にもなお行われていたことを論じたものである。当然ながら「靖康の変前後」を知るためにはその前後を把握する必要があり、また「靖康の変前後」を知ることでその前後への理解が深まる訳だが、前掲論文などはそのような有機的な研究成果であると自任する。

以上、仮に研究成果を四点に分けて論じたが、これ以外の成果も存在するものであり、それらについては業績の一覧に掲載されている。全体に当初想定したよりも基礎的な研究に傾いた嫌いはあるが、これは当初の想定よりも更に当該の分野は「足元」が弱いという現実に直面した結果でもある。それを踏まえれば、研究期間の多くがコロナ禍であったことも含め、全体として当初の計画と同等かそれ以上の成果を得たものと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 毛利 英介	４．巻 54
２．論文標題 『紹興甲寅通和録』から見た劉斉をめぐる国際関係	５．発行年 2021年
３．雑誌名 関西大学東西学術研究所紀要	６．最初と最後の頁 253～279
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32286/00023736	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 毛利英介	４．巻 30
２．論文標題 10-13世紀東アジアAsia国際関係史に関する随想	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中国史学	６．最初と最後の頁 131‐146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 毛利英介	４．巻 なし
２．論文標題 山根報告へのコメント	５．発行年 2021年
３．雑誌名 歴史資料と中国華北地域ー農耕・遊牧の交錯とその影響ー	６．最初と最後の頁 69‐72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 毛利英介	４．巻 233
２．論文標題 十五年も待っていたのだ！－南宋孝宗内禅と対金関係	５．発行年 2019年
３．雑誌名 アジア遊学	６．最初と最後の頁 100 - 113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 毛利英介	４．巻 なし
２．論文標題 遼使の西夏派遣時における外交儀礼についてー遼「秦徳昌墓誌銘」を手掛かりにー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 続 中国周辺地域における非典籍出土資料の研究	６．最初と最後の頁 43－63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 毛利英介
２．発表標題 『靖康稗史』の「出現」について－『謝家福書信集』所収史料の紹介
３．学会等名 第六回金毓黻と東北アジア史研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 毛利英介
２．発表標題 影印文瀾閣四庫全書所収『三朝北盟会編』調査報告
３．学会等名 京都大学人文科学研究所「前近代ユーラシア東方における戦争と外交」共同研究班例会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関